

エッセイ

第二の故郷

ドイツ・パッサウと
エアランゲン

大瀬 克博



三つの河が合流する古都パッサウ

うに嬉しかった。パッサウは私の大好きなそして懐かしい街で、今も書斎の壁に貼った1m角の大きな航空写真で市街を眺める日々である。

パッサウはドイツのバイエルン州南東部にある人口5万人の小都市である。日本で人気の高いドイツの観光地はロマンティック街道、ハイデルベルク、ミュンヘンなどであるが、パッサウはそれに勝るとも劣らない街だと思う。

パッサウはバイエルンの州都ミュンヘンから180km東に位置してオーストリアと国境を接し、市の中心部でドナウ、イン、イルツの三つの河が合流する「三つの河の街」そして中世の面影を残す「パロックの町」と呼ばれる美しい古都である。ドナウ河はドイツのシュバルツバルト（黒い森）に源を発して南ドイツを横断し、パッサウでオーストリアのチロル地方から北上するイン河そしてバイエルンの森から南下するイルツ河が合流し、大河ドナウとなつてウィーンを目指し南下するのである。

パッサウの歴史は古く紀元前に居住したケルト人に始まる。2世

紀初めにはローマの要塞が建設され、11世紀には神聖ローマ帝国で自治権を持つ領主司教国の首都、13世紀には帝国最大の領地を有する司教国首都に発展し1803年にバイエルン選帝侯国に編入された。宗教改革時代の1552年には皇帝カール五世と新教徒諸侯の間でカトリックとプロテスタントの平和共存が確認されるパッサウ条約がここで締結されている。

千年の歴史を持つ白壁と赤い屋根の旧市街はドナウ河とイン河に挟まれた三角地帯で、河の向こうは緑の丘陵が広がる色の調和が見事な美しい街である。ドナウ河畔の丘に聳える中世の城塞から見下ろす景観は特に素晴らしい。詩人で小説家のハンス・カロツサは「ドイツで最も美しく瞳目に値する景観」と称揚している。

私とパッサウの縁である。私は1975年から5年間を駐在員としてドイツで過ごしたが、最初の4ヶ月はパッサウでの語学研修であった。語学学校ゲーテシューレは学生数1000人程度の家庭的な雰囲気のある学校である。学校食堂で

高いコーヒートの朝食、諸国の学友たちと街のレストランでの昼食、そこで交わす拙いドイツ語での会話、4ヶ月間繰り返した学校生活である。九州人に共通するドイツ南部特有の純朴で陽気な気風の町の人たち、親切なゲーテシューレの先生、そして学友たちとの触れ合いなど、パッサウでの生活は楽しく充実したものであった。これでドイツがすっかり好きになり、その後に続くドイツとの長い関わり合いのスタート点になった。パッサウに来てまず驚いたことは戦後30年の敗戦国ドイツが当時の日本に比べ大変豊かだったことである。歴史的な蓄積の違いだったかもしれない。

パッサウでは眼鏡店で働く日本人男性と知り合い親しくなった。眼鏡マイスターを目指し働きながら職業学校で学んでいた久利七男氏である。彼はパッサウでゲゼレ（熟練技師）の国家資格を取って実務経験を積みそしてマイスター試験に挑戦するためベルリンの国立眼鏡学校に学んだ。マイスター試験は専門技能のみでなく物理学、医学、法学、商学、社会学なども含まれ、しかも2度失敗する

パッサウ

先日のことである。妻が「友人のSさんが観光旅行でドイツとオーストリアを回りパッサウが一番良かったそうよ」と弾んだ声で外出から帰ってきた。パッサウは妻も何度か訪れていて話が盛り上がったらしい。パッサウが一番」と聞いて私は我が意を得たよ

と受験資格がなくなる厳しいものである。ドイツではマイスター資格がないと開業も弟子の指導もできない。また称号を大事にするドイツ社会ではマイスターの地位は高い。彼は渡独7年目に合格し日本人初の眼鏡マイスターとして地元神戸で眼鏡店を開き新聞報道などで話題になった。私はパッサウを離れてからも親しく交流し、それは今も続いている。

仕事での出張も多くドイツそしてヨーロッパの多くの都市を訪れたが、私はパッサウの景観が最も気に入っている。ドイツ駐在員時代には何度もパッサウを訪れているが、日本に帰ってからも出張の機会に足を延ばしたことがある。最後のパッサウ訪問は10数年前のドナウ河水力発電所見学の時であった。提携会社シーメンスの社員が案内してくれたが、その時に予想もしなかった素晴らしい経験があった。その社員の友人がたまたま世界最大級パイプオルガンのあるシュテファン大聖堂の首席奏者だったのだ。この大聖堂はウィーン大聖堂の本山にあたり8世紀半ば以来の歴史を持つ教会である。この首席奏者が自ら教会内

を案内してくれ、なおかつパイプオルガンを特別に演奏してくれた。大聖堂に荘厳に響くパッサウの「トッカータとフーガ」は感動的で今も耳に残っている。

エアランゲン

パッサウでの語学研修が終わり同じバイエルン州のエアランゲン市で駐在員の仕事に入った。エアランゲンはバイエルン州第二の都市ニュルンベルクの隣町で人口10万人、グローバル企業シーメンス社とエアランゲン大学の拠点である。シーメンスはエネルギー、産業、医療部門の本社機構、中央研究所そして二つの製造拠点を置いている。また、隣接する小さな町ヘルツォーゲンアウラハには有名なアディダスの本社がある。村のような小さな町にグローバル企業の本社とは日本では考えられない。

エアランゲンは歴史的建造物と近代性が調和した落ち着いた町であり、ドイツを代表する質の高い地方都市として知られる。環境先進国ドイツは1989年に環境分野における市町村の取組みコンテストを全国レベルで開始し、エア

ランゲンは最初の環境首都に選ばれた。私が住んだ1970年代には自転車道の整備が始まり、その頃から通勤、通学、買物など自転車を利用する人が多かった。今ではエアランゲン市内の自転車道は網の目のように張り巡らされ安全で便利な環境に優しい交通手段となっている。現在のエアランゲン街づくりビジョンは「医療健康都市」である。市民、企業（シーメンス）、研究機関（エアランゲン大学医学部）と市当局が連携し健康増進そして医療ビジネスで経済振興を図るという目標である。10

0年ほど前に発表された競争力、豊かさ、福祉など都市の将来性ランキングがある。エアランゲンは全国7位、ミュンヘンが1位、デュッセルドルフは18位、首都ベルリンは262位であった。私はここエアランゲンで4年半を駐在員として生活した。駐在員の仕事は技術調査、通訳、日本人訪問者のアテンド、観光ガイド兼運転手など何でも屋である。出張も多くドイツの主な都市はほとんど訪ねている。駐在員の仕事の大きなメリットに日本そしてドイツの異業種異分野のいろいろな人と

の触れ合いがある。そこから学べることが非常に多くエアランゲンでの4年半は多忙ではあったが充実していた。

エアランゲンが一年で最も熱くなる時期がある。それは5月から6月にかけて10日間行われる謝肉祭ビール祭りである。これは名高いミュンヘンのオクトーバーフェストより5年も前の1755年に始まっていてエアランゲんっ子の自慢である。人口10万のエアランゲンはこの期間に100万人が訪れ賑やかになる。私たちが家族が住んだマンションはこの会場から200m程度の所にあり開催期間中は夜遅くまで眠れないほどの喧騒であった。シーメンス社など地元企業は職場毎に夕方から繰り出すのが常であり、私は祭りの期間中少なくとも職場で一回そして家族と一回は訪れていた。シーメンスにエアランゲン出身の社長が在任した時期がある。この社長はエアランゲンのビール祭りには例年必ずミュンヘン本社から駆け付け参加していた。エアランゲン人には参加必須の祭りなのである。

日本に帰ってからも仕事でエア

ランゲンに来ることが多かった。会社を辞めるまでの訪問回数は50回近くになる。出張訪問の最後は2009年1月で、この時は昔住んだマンシオンを訪れた。その翌月のこと、NHKで「世界わが心の旅」という再放送番組を見た。旅人は政治学者の姜尚中氏、訪問地はエアランゲンであった。姜氏はエアランゲン大学に2年間留学したことがあり懐かしい思い出の地だったのである。しかも氏は私がドイツを離れた年に来独していて、私のマンシオンに隣接する大先輩に住んでいた。これには驚いた。姜氏は私と同じ熊本出身で自らを愛郷者と語るほど熊本大好き人間である。そして更に驚く出来事があった。テレビを見た2ヶ月後の夜、私が都内ホテルの小さなバーで飲んでいると左肩にリュックを掛けて入ってくるダンディな男性が目に入った。何と姜氏であった。席を探して近くに連れられたので私は声をかけ自己紹介をした。姜氏は空いていた私の隣席に座られ、熊本そしてエアランゲンと共通する二つの故郷を話題に楽しく懇談する機会を得たのである。奇遇であった。

バイエルン州

バイエルン州はバイエルン州に属する。バイエルン州はバイエルン王国の王室文化を継承しドイツ北方のプロイセンと違う文化を持つ。政治的には保守王国であり、州政権与党のキリスト教社会同盟CSUはドイツ連邦首相メルケルが率いるキリスト教民主同盟CDUの姉妹政党で右寄りの政策で知られる。CDUはバイエルン州での政治活動は行っていない。またシーメンス、BMW、アウディ、アディダスなど世界企業がバイエルンに本社拠点をもちドイツ国内で最も経済力のあふ豊かな州である。今スペインではカタルーニャ独立運動が大きな問題となっているが、ヨーロッパで次に独立運動を起こす可能性のある一つがバイエルン州と言われる程に独立指向が強い。

バイエルン州は独自の文化を持つが背景はその歴史にある。バイエルンは神聖ローマ帝国時代の12世紀頃からヴィッテルスバッハ家が治め、バイエルン選帝侯時代を経て1806年にナポレオンと友好条約を結びバイエルン王国が誕生した。1815年にはドイツ

連邦に参加し、1872年のドイツ帝国成立でバイエルン王国はプロイセン王国に次ぐ領邦となる。そして第一次世界大戦後のドイツ革命でバイエルン王国は消滅する。バイエルン王国最後の王は六代目ルートヴィヒ三世だが、狂王とも呼ばれた四代目ルートヴィヒ二世は有名なノイシュヴァンシュタイン城、バイロイト祝祭劇場などを作っている。

バイエルン州はその長い歴史の中でドイツ連邦国になつてからは僅か200年である。バイエルン文化は同じドイツ語圏のオーストリア、スイスとの共通項が多いように私は思う。それは言葉、民族衣装、料理などにも表れている。バイエルン人は祭りが好きで、各市町村ではそれぞれに例年賑やかなビール祭りが開催される。エアランゲンの祭りは前述の通りであるが、もつとも有名なのはミュンヘンのオクトーバーフェストである。9月末から2週間の開催で延べ6百万人が訪れる。外国からも多くの観光客が押し寄せホテルの確保は困難を極める。そして祭りの会場はバイエルンの民族衣装を着た人々であふれる。女性はディ

ルンドルと呼ばれる胸の所が大きく開きウエストを細く絞ったドレス、男性はレダーホーゼと呼ばれる刺繍を施した革の半ズボンにハイソックスに洗いざらしの昔風のシャツである。民族衣装がビール祭りの正装である。学校や幼稚園の行事でも着ることがあり、娘たちもディルンドルを着て学校に行くことがあった。「アルプスの少女ハイジ」の服装である。横浜赤レンガ倉庫でも毎年9月末から10月中旬まで横浜オクトーバーフェストが開催されている。

バイエルンの人として方言のことをバイエリッシュという。ドイツの田舎者という意味をこめる場合があるが、現代のバイエルン人はこの言葉に誇りを持っている。それは第4次産業革命インダストリー4.0の先頭を走るハイテク州であり、その豊かな経済力が背景にある。インダストリー4.0はIoT、AIを基軸にドイツが国を挙げて進める技術開発と企業振興である。横浜市と横浜日独協会がバイエルン州とタイアップし「ドイツ・インダストリー4.0」セミナーを横浜市で毎年開催している。



バイエルンの民族衣装

市の中心部を流れる大河そして河畔の丘に聳える中世の城塞、故郷の古い城下町人吉を思わせる美しきパッサウ、そして4年半住みよの後の訪問回数が増え、郷里人吉を越えるほど訪ねたエアランゲン、この二つの街は私の第二の故郷である。二人の娘も新婚旅行の機会にエアランゲンを訪れている。エアランゲンは娘たちにも思い出の地である。

エッセイ

車窓雑記

佐藤 猛夫

はじめに

学生時代、都立大学駅近くのアパートから通学していた私は東横線に何回くらい乗っただろうか。どこへ出かけるにしても先ずこれに乗るしかなかったから、千回、いや二千回以上は乗ったかも。

サラリーマンになって、あちこち引越しの末横浜のはずれに住むようになってからは、東海道線を毎朝毎晩飽きもせずに行ったり来たり、いや飽きてもいたけど半ば惰性で乗っていました。

ところでこの国に生まれ育って60年、ちよご還暦をむかえた年・・・今から10年余り前のことでしたが、未だに一度も乗ったことのない路線も随分あるんじゃないか、それならこの際日本全国の鉄道路線を隅から隅まで全部乗ってみよう、と思い立ったのです。

取りあえずは第三セクターだとか私鉄は除き、JRを全線乗って

みようかと決めたのです。

さて、世間には鉄道マニアといわれる方々が随分いるようで、撮り鉄、食べ鉄、乗り鉄などとジャンル別に分かれ、乗り鉄では、各種型式の車両をしらみつぶしに乗る人、愛称のついた特急や急行、更には最近売り出しの超豪華列車に乗ることを楽しみとする人、秘境駅や鉄道遺産巡りに精を出す人など細かく分類されるようですが、私は難しいことは一切抜きで、ただ車窓からのんびり景色を眺めることに徹しようと思決めました。

第一話

平成19年2月下旬、まず第一弾として南九州ローカル線の旅に出ました。

実は私は昭和が平成に移る頃の約5年間、鹿児島に赴任しておりました。当時、せっかく九州にきたのだからと、休暇を利用してあちこち回ったのですが、殆んど全て車で、JRにはあまり乗っていませんでした。

羽田から鹿児島空港まで飛行機、空港から枕崎まで高速バスに乗り、昼ごろ枕崎に着きました。鹿児島着任当時の枕崎駅は、ここ

から薩摩半島の西側を北へ向かう私鉄、鹿児島交通の接続駅でもあったため、何本かの引込線や駅舎、倉庫もあったように記憶していますが、今はJR指宿枕崎線の一日数本の列車が発着する終着駅。新しく造られたホームがあるだけのこじんまりした駅になっていました。

枕崎から山川まで、晴天ならば車窓には常に開聞岳が見えるのですが、この日の鹿児島地方はあいにくの雨。雲が低く垂れこめ、開聞岳は全く姿を現しませんでした。開聞岳の東側の麓にある西大山駅は、周囲に人家もない畑の中の小さな無人駅です。但しホームに3メートル位の標柱が立つっており、白地に黒く「日本最南端の駅」と表示されており、開聞岳をバックにこれを写真に撮るために訪れるマニアも多いようです。

列車は指宿を過ぎると薩摩半島の東岸を北へ向かうようになり、右手には錦江湾と桜島が望めるのですが、雨でこれもだめでした。

翌朝、雨は上がり、宿泊したホテルからは錦江湾を隔てて眼前に美しい桜島の雄姿。

この旅の3年前九州新幹線が鹿